

『熱情ドルチェミスト』

著: 藍生 有

ill: 六芦かえで

「道」

名前を呼ばれて顔を上げると、エンツォと目が合う。彼は口元の笑みを更に深いものにして、道の手を取った。

「私はあなたをもっと知りたいと思っています。あなたのすべてを知りたい。今夜は私と過ごしていただけませんか」

「えっと……そんな言い方されると、なんか照れちゃいますね。誘われてるみたいで」  
はは、と笑い飛ばそうと思っていた。だけどエンツォの青い瞳に言葉を失う。

空気がぴんと張り詰める。どうしよう。エンツォがさっきまでとは別人だ。一体どうなっているのだろうか？

「誘っているつもりですが」

エンツォが目を眇(すが)めた。そうすると彼の端正な顔が、とても艶(つや)っぽく変化してしまう。視線が熱(あつ)っぽい。

「えっと……」

一日で二度も男に誘われるなんておかしい。しかもこんな素敵な人が自分を誘うのはありえない。

だがエンツォにふざけた様子はなかった。唇には笑みが浮かんでいるものの、眼差しは真摯だ。その熱を直視できずに俯いた。

「その、……俺、男ですよ？」

分かりきっている事実を、あえて口にして確認する。

「何も問題はありません。私はあなたが好きなのですから」

エンツォは簡単に一(いっ)蹴(しゅう)した。

「好き？」

あまりに自然と言われた単語に耳を疑う。

「ええ。空港で酷(ひど)い目にあった私の前に、あなたは優しい笑顔で現れた。天使のようだ」

「天使……？ 俺が？」

はは、と笑おうとして、失敗した。エンツォと目が合ってしまったせいだ。彼は青い瞳を道へ向けていた。

絡(から)まった視線が解(ほど)けない。彼の瞳の熱に溶かされそうで怖いのに、瞬(まばた)きも忘れてしまう。

エンツォは、仕事中に口説いてきた男とは違う。好感はもてる。だけど、それと恋愛感情は別だと思う。……たぶん。

考える内に自信がなくなってきた。これもすべて、エンツォが自分を愛しげに見つめているからだ。

「……とりあえず、今日はもう帰ります」

このまま二人きりでいると、雰囲気(ふんいき)に押し流(なが)されてとんでもない事態(じたい)が起きる。本能

に急(せ)きたてられて立ち上がろうとした道の手を、エンツォが掴(つか)んだ。

「どうして？ 私が嫌いになりましたか？」

悲しそうな目で見ないで欲しい。自分が悪いことをしている気分になるから。

「いえ……そういうわけではないのですが」

今の状況に、ちょうどいい言葉が見つからない。

「ではもう少し、あなたのことを教えてください。私はあなたのすべてを知りたい。そしてあなたにも、私を知って欲しい」

エンツォの手が顎(あご)にかかる。

「道」

名前を呼ばれてつい目を閉じてしまったのは、エンツォの顔を直視するのが恥ずかしかったからだ。けっして、キスをして欲しかったわけじゃない。

そんな言い訳を頭の中でしている内に、唇には柔らかな感触が押し当てられていた。

「んっ……」

温かなそれは、エンツォの唇だ。つまり自分は、エンツォとキスをしている……。

なんでこんなことをしちゃっているのか。考えたくとも、唇全体を包むように吸われ、上唇を軽く食(は)まれると、頭がぼうっとしてどうにもならなかった。

唇の表面を舐(な)められると、そこから甘い痺(しび)れが広がっていく。唇を触れ合わせてただけで、どうしてこんなに胸が痛むのだろう。心音が激しすぎて怖くなる。

そっと唇が離れた。薄く目を開ける。エンツォは火傷(やけど)しそうなほど熱い眼差しで、道を見ていた。

「……あなたの唇の味を知りました。次はこの、肌を味わわせてください」

エンツォの手が首筋に触れる。そっと撫(な)でられ、皮膚の内側に震えが走った。

「や、くすぐったいつ……」

咄嗟に逃げようと身をよじる。すると抵抗を押し返すように、エンツォが圧(の)し掛(か)かってきた。

「道。あなたは私がどんな男か知りたいとは思ってくれませんか」

エンツォの手がシャツのボタンを外していく。どうしていいか分からず、道は目を泳がせた。

強く押さえ込まれているわけでもない。たぶん暴れれば逃げられると思うのに、指一本動かさずに固まったままだ。

「あの、……やっぱり、こんなこと、その……いきなりするのっておかしいです」

なんとか声を絞り出した。

「おかしい？ 何故？」

エンツォの指が頬をそっと撫(な)でる。まるで恋人にするかのように、優しく。

「だって、出会ったばかりだし……」

「この地球上で、約束もなく再会できた。これは運命です。いつ出会ったのかは問題ではありません」

ゆっくりと諭(さと)すように言われてしまう。運命？ そんな言葉を簡単には信じられないし、それですべてを片付けられるとも思えなかった。

「でも、……男同士だし、こんなこと……」

「怖がらないでください。もしいやになったら、私を殴(なぐ)りなさい」

エンツォは道の目を見て微笑んだ。

「そうすれば私はあなたに触れません。約束します。私は、あなたを苦しめることを望んではない」

右手をエンツォが持ち上げる。そのまま手のひらを彼の左胸に触れるよう導かれた。「ただ、私の気持ちを疑わないでください。道、……分かりますか？」

手にエンツォの鼓動が伝わってくる。力強くて速い。そのリズムにつられたように、道の鼓動も速くなる。呼吸が浅くなり、指先が震え出す。

「私に抱きしめられるのがいやなら、その手で私を殴りなさい。約束ですよ」

エンツォの手が離れた。ぎゅっと右手を握る。だけどその手をエンツォに当てることなどできやしない。だってここにはまだ、彼の鼓動が残っている。

「エンツォ……」

どうしていいか分からずに彼を見上げた。彼は道の迷いも戸惑いも何もかも飲み込むような熱っぽい眼差しで顔を近づけてくる。

「すべて私に任せればいい」

唇に吐息が触れる。首を傾げたエンツォは、道に頬を寄せてうっとり囁いた。

本文 p49～55 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>